

東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時): 教養学部文科三類二年

参加プログラム: SOAS summer program

派遣先大学: SOAS, University of London

卒業・修了後の就職(希望)先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体

⑤民間企業(業界:) 6.起業 7.その他()

派遣先大学の概要: SOAS はアジア圏の研究に特化していたので同じコースの人のみならず蔵書や同じ寮の学生にアジア圏の人が多かった。

参加した動機: 英語力の向上、今までの文法重視の学びを、実践の会話に生かしたかったため。結果、予想以上にプログラム内容が難しかった分、思った以上に英語のスキルが上達したと思う。

参加の準備

① プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

時差と休日を考えて連絡を取る必要があると思う。

② ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

ビザには思った以上に並んだ。審査官が滞在先などをいくつか質問してくるが、到着したばかりの身には英語が速すぎて聞き取れず手間取ってしまった。

③ 医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)

出発前に喉が痛んだので病院で薬をもらってから入国した。日本から海外に薬を airmail で送れないと思うので、心配な時はなるべく多く持っていくといいと思う。

④ 保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

損保ジャパンの OFF! という海外保険に入っていた。案の定、着いて4日で風邪が悪化し発熱したが、海外保険のオプションで病院の紹介から予約、支払いまでしてもらえたので、保険は必ず入っておくべきだと思った。

⑤ 留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

日程がかぶってしまった期末試験2科目を、教授にレポートに代えて頂いた。ただ、他クラスの友人は必修が期末0点扱いになったようなので、大学側がグローバルを推進しているなら進振りに大切な試験の考慮をしてくれても良いのではないかと少し疑問に思った。

⑥ 語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

IELTS5.5 以上が目安のコースに、IELTS5.5 で行った。つらかったのですが、目安は的を射ていると思う。コースの参考文献に記載されていた本を読んで行ったが、日本語訳版を読んでしまったので、あまり意味がなかった。英語で読んでいくべきだった。

⑦ 日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

日本食を大量に持っていったが、持参して本当に良かった。突然食生活を180度変えると体調を崩すもともになると思った。また、食事は自炊でキッチンが共用だったので、日本食をシェアすることで他国の学生たちと文化交流できた。

学習・研究について

① プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)

Preview, Lecture, Review のセットだったが、ディクテーションスキルだけでなく、ディスカッションしたり名指しで当てられたりと、日本の聴講型教育とは全く異なるスタイルが新鮮で、とても頭を使った。受け身ではなく、能動的に授業を受けることの素晴らしさを実感した。

② 学習・研究面でのアドバイス

授業中積極的に発言することが、議論を活性化させ、また自分自身の英語力を向上させることにつながると思う。

③ 語学面での苦勞・アドバイス等

オーラルイングリッシュは文法を気にしないで良いと言っても、あまりに破たんしていると本当に通じないので、文法も大切だと思った。

生活について

① 宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

大学の寮だった。部屋は個室で良かったがシャワーとトイレの部屋が狭く汚く虫すら湧いてきて大変だった。ただキッチンが共用だったので料理を通じて他国の学生と交流できたのがとても良かった。

② 生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

寮の立地がとても良く、交通の便が良かったので毎日放課後観光に行けた。天気は過ごしやすく快晴で最高だった。クレジットカードがどこでも使えるので、本当に便利だった。食事は、調理器具を持っていれば刺身以外なんでもできると思った。ただ、物価が高いので食事は節約していた。

③ 危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

夜9時ごろまでは明るいですが、暗くなるとやはり怖く、友人も携帯を取られたりしたので、夜と、路地は、特に気を付けるべきと思う。海外の薬はよく効いた。

④ 要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

ロンドンでは物価が高いので予想以上に金が必要になり、最後の方はクレジットカードに頼りきりだった。

⑤ 奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

東大のプログラム紹介で見つけた、卒業生の寄付の奨学金を頂く予定。20万円だが、ロンドンの物価の高さを考えると、もう少し頂けたらな、と思った。しかし頂けるだけで恵まれている。

⑥ 学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)

同じコースの外人だけでなく、友達の紹介で知り合った人や、同じフラットの人、また週末に参加したツアーで出会った人など、想像以上に多くの他国の人と交流でき、とても嬉しかった。特に、タイ人と観光イタリア人たちと文化について話し、中国人たちと日中関係について話せたのがとても良かった。

派遣先大学の環境について

① 参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

語学サポートはそれほどなかった。寮のセキュリティはしっかりしていたが、住環境は劣悪だった。イベントをときどき開いてくれるのがありがたかった。

② 大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)

wi-fi環境は微妙だったが、食堂は比較的安く、図書館もアジア圏の蔵書が豊富だった。

プログラムを振り返って

① プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

私のコースだけでなく、他のどのコースでも、半分以上が日本人で(ICUと東京外語大学がグループで来ていた)、はじめは興奮ぎみでしたが、日本人は日本人同士で固まるというのは神話ではなく真実で、常に日本人が固まっている印象を受けた。できるだけ外人と英語で交流したいと思っていたが、一緒に観光したり料理したり語り合ったり、予想以上に国際交流できたので、最後には日本人占有率はあまり気にならなくなった。ただ、他大学とかぶらない考慮も必要なのかもしれないと思った。参加を通じて、英語で話し、意見を言うことだけでなく、挨拶や日常コミュニケーションの取り方も学べ、ロンドンに住むことは貴重な経験だった。英語力の向上や国際交流において想像以上の収穫があった。

② 参加後の予定

次の機会にはアメリカに留学したいと思う。ただ、留学は第一にお金があるので、留学のためになるべくお金をストックしようと思う。

③ 今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

留学は本当に素晴らしい経験で、行ってみたいと少しでも思っているなら、必ず行くべきだと思う。

その他

① 準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

ロンドンの日本人留学生のブログを読んだり、観光サイトを見たりした。学生同士はおもに Facebook でやりとりするので、アカウントのない人は行く前に作ったほうが良いと思う。

③ その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。



東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時):教養学部文科 I 類 2 年

参加プログラム:IFCELS Summer Course 派遣先大学:SOAS, university of London

卒業・修了後の就職(希望)先: 7.その他(未定)

派遣先大学の概要

SOAS は、University of London に所属する、アジアやアフリカ・中近東といった地域を主な研究対象とする研究機関になります。それらの地域からの留学生にはかなりオープンな大学であり、今回私が参加したコースと並行して行われていた学位取得予定者向けの語学教育プログラムを受講している人などにもそうした留学生が多く見受けられました。

キャンパスはロンドン市内中心部・Russel Square にあります。大英博物館が徒歩 3 分程度のところに所在しているのをはじめ、様々な場所へのアクセスが良い場所でした。博物館・美術館などの見学にその他異文化体験にと、留学生がイギリス留学でカリキュラム外にも多くの学びを得るとい点では非常に優れた立地であったと感じています。

参加した動機

個人的に英語が苦手で、かつ日本に居ながら教材を使うのみで勉強することに限界を感じたので、いっそ英語圏に留学して「殴られ」ながら学んでしまった方が早かろうと感じたことが最大の動機です。他にも英語圏の Summer School は開講されているにも関わらず SOAS を選択したのは、東大での試験期間と被らなかつたことが理由として大きいです(結果としてこの選択は成功だったと言えるわけですが)。

プログラム内でのコース選択動機についても、以後に書く場所がないのでここに記しておきます。私は「Introduction to the media」というコースに居ました。私自身が大学入学以後わりとマスメディアに興味を持ってきており、かといって前期教養で集中的にメディア論をやる機会はなかつたので、良い機会だと思って(英語力はギリギリながら)参加することにしました。

参加の準備

①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

授業料等の払い込みを行う際、日本で使用しているクレジットカードが使用できない場合があります。問い合わせた結果、家族が所持していたカードでひとまず払い込み結果的には特に問題なく事務を終わらせることができましたが、当時は(そもそも英語での問い合わせをすること自体に私が慣れていなかったこと、また私の初動が遅く期限ギリギリではないかと思われたこともあり)かなりひやひやしたのを覚えています。

ひとまず、当然ともいえることですが、送られてくる書類には即時目を通し、可能な限り早めに処理していくことをおすすめします。また、英語力に自信がなくちゃんと理解できているか等の不安があれば、周囲にいる英語が達者な人にも相談しつつ手続きを進めていったほうが良いかもしれません。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

Student Visitor Visa/SVV と呼ばれる、6ヶ月未満の短期滞在用留学生ビザです。入国時に空港で発行可能ですから、日本でやっておくべきことは空港で入国審査官に提出する書類の用意のみになります。審査官によってどの程度書類を要求するかは異なるようですが、以下の書類があれば特段困ることはないかと思います。

- 学校からの入学許可証原本(ビザレター)
- 滞在費用証明(日本の銀行で預金残高証明を英文ポンド建てで発行して貰っておくと良いでしょう)
- 滞在先の詳細、証明書
- 帰国する航空機の航空券もしくはその控え

入国の際には、審査官から留学先の大学、留学中の滞在先、学習内容などといった点を聞かれつつ上に挙げた書類を提出していくことになります。簡単な会話ですから心配し過ぎることはないと思います。

③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)

特に必要ありませんでした。

④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

生協でパンフレットを貰い、AIU 保険会社のものに加入しました。ここはそれぞれの好みで選べばよいと思います。

⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

教務課に伺ったところ、「進振りの手続きを海外で行うことになるから注意するように」との注意は受けました。来年以降 2 年生で同様の時期に SOAS に行く人が居れば、Wifi 環境は不自由しませんので PC さえ持っていけば困りはないと思います。

⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

2 月に受験した IELTS のスコアバンドは 5.5、中でも Speaking が弱いという感じでした。その後、大学での必修英語

以外に何かやった記憶はありません。自分はそのことでコミュニケーションの壁をずいぶん作ってしまったという反省があるので、もし英語でのコミュニケーションに不安があるようでしたら大学での PEAK 科目受講・その他英会話の訓練ができる場所に身を投じることを強く勧めます(その理由については後述)。

⑦日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

物価が高いですから、結構余裕を持って現金を持って行っても底を尽きる可能性は十分にあります。というわけで、当然のことかもしれませんが、クレジットカードは必ず持参を勧めます(クレジットカードは暗証番号を入力してでないと使えないところが大半ですから、そちらの発行も忘れないように)。

あとは、非日本人とのコミュニケーションツールとして日本文化を象徴する小物(お菓子・折り紙などが思い浮かびます)を持っていくというのは良いと思います。交流の機会は必ずありますので。

学習・研究について

①プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)

「Introduction to the media」というコースに限った話になります(他のコースも English skill のみでなければほぼ同様なのでしょうか。イマイチ存じ上げないですが)。

その分野を専門とする教員と語学サポートの教員が付きます。後者の教員の方が良く面倒を見てくれた印象です。Lecture は専門教員がやり、その Preview, Review をサポート教員がやってくれます。加えて、Tutorial と呼ばれるディスカッションのコマや Case study と呼ばれる 2 コマ連続で具体的事例について議論するものもあり、これらはいずれも専門教員が担当でした。また、サポート教員が担当の英語学習が主となる講義も数回行われました。

さらに、このコースの特色として、4 人のグループで街に取材に出掛けてインタビューをし、5 分前後のドキュメンタリー映像を作成するという最終課題があります。それなりに自由時間をこの取材に割くことになり、編集の時期には遅くまで大学に残っての作業を強いられたりもします。英語でのコミュニケーションに慣れるのにすら必死な中でこうしたタスクを積まれるのは当然苦勞しますが、その分完成した映像を眺めるときには感慨深い思いがあります。技術指導などは講義の中で行ってもらえますので、あまり心配する必要はありません。

②学習・研究面でのアドバイス

Lecture をきちんと理解するのは難しいかもしれません(少なくとも私はそうでしたし、同じコースに居た日本人の多くもそうであるようでした)。それでも、Preview で聴いた単語などを手掛かりに、わからないながらにノートを取っておきましょう。それを材料に Review を受ければ、なんとなく講義全体が掴める程度にはなるかと思えます。その際に大事なものはコミュニケーション(わからないところを他人に訊ける)だと思えます。

③語学面での苦勞・アドバイス等

2,3 人グループでのディスカッションでは何とか喋れるようになっていきましたが、全体での議論の席になると聞いた内容を理解しようとする間に話が進んで参加することもままならなかった、というのが、個人的に一番この留学で悔しかったところであり、反省であったりします。これから準備するにあたってまだ時間があるのでしたら、何らかの形で英語でのコミュニケーションに慣れる機会を作っておいた方がいいです。圧倒的に学習効果が上がることと思えます。

生活について

①宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

SOAS からの斡旋で、Dinwiddy house と呼ばれる寮に宿泊しました。立地は良く、様々な場所へのアクセスに便利でした(King's cross 駅が近いですし、大学には徒歩 20~30 分程度で行けます)。家賃はというと、少なくとも安くはないです。宿舎は全部屋個室、6 人 1 フラットでキッチンを共有する感じです。部屋は狭いですし、シャワーの機能などあまり十分とはいえない面もありましたが、ひとまず生活に困ることはないかと思えます。洗濯が高価なのですが、他に手段が無いので諦めるしかありません。同じプログラムの参加者はかなりの割合で同じ宿舎に居ますので、そういう意味では色々楽しめたかもしれません。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

気候としては非常に過ごしやすいです。ただ私の滞在期間はロンドンにはあるまじき、と言われるくらいには降雨が少なかったようです。

大学周辺は、先ほど書いた通り大英博物館なども近く便利な地域です。バスや地下鉄の便も良いので、大抵のところに出掛けるには良い拠点になると思えます。

食事は、噂に聞くイギリス料理のイメージとそこまで違わないと思ってください。美味しい！と言えるものもありますが、そうでないものも多いです。しばらく過ごしていくうちにどの何が良いのかは分かってくると思うので、その過程を楽しむと良いと思えます。

お金の管理についても先述した通りです。ポンドは余裕を持って準備しておいてください。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

治安に関しては特に不安に思ったことはありませんでした。医療機関については、お世話になる機会がなかったのですが私は存じ上げません。心身の健康管理としては、ひとまず睡眠をきちんととることでしょうか……？

④要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

- 授業料・滞在費 計 £2,000 程度(+前後に追加で 5 泊したのでその分滞在費が上乗せされています)

- 航空賃 21 万円程度

- 滞在中の諸費用(食費・洗濯代金・観劇費・入場料等) £650

合計すると 70 万円を割る程度でしょうか。最下段の諸費用については個人次第で節約可能だと思います(節約に気

を取られすぎて向こうでしかできない体験を逃すことがないように)。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)
東京大学経由で支給されたもののみです。卒業生の寄付によるもの・20万円。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)
放課後の空き時間や週末は先述の課題制作に充てたほか、少し遠出しての観光や観劇、諸博物館見学、街歩きなどに時間を割きました。街歩きは日本と全く毛色の違う整った街並みを楽しむことができます。また、博物館は無料のところが多いですので、気軽に出かけると良いと思います。観劇は少し値が張るものが多いですが、自分は値段相応以上に満足したと思いますし、周囲の人も同様の感想を抱いているようでした。

派遣先大学の環境について

①参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)
担当教員次第というところが実は大きいように思いますが、少なくとも私の場合は語学サポート教員がとても良い先生で、様々な不安を軽減してくれるようにコミュニケーションを取ってしてくれたように感じます。その他のサポートが特になされていたとは思いませんが、特に不自由を感じることはありませんでした。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)
私はそこまで利用しませんが、周囲に聞く限りでは図書館はかなり充実したものであったようです。SOASのアジア・アフリカ研究という特質上、イギリスの研究機関が日本についてどういった資料を集めているかなども目にするのができたようなので、そういった点に興味を湧く人は目を通してみると良いかもしれません。
食堂は、可もなく不可もなくといった感じです。私個人は、大学近辺にあるサンドイッチ店が美味しかったのでそちらをちょくちょく食べに行っていました(take awayして公園で食べたりするのも気持ちの良いものだったなと思い返しています)。
PC環境を普段そこまで使うことはありませんが、映像制作の際には存分に使いました。技術指導まで含めて、文句のない環境が整っていたと思います。

プログラムを振り返って

①プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感
英語のスキルアップを図りつつメディアについての勉強もするべく、“Introduction to the Media”というクラスで3週間過ごしたわけですが、色々な意味で苦労した3週間だったと感じています。それは、スケジュール自体が後半は過密なものになったことに加えて、英語力不足という意味でもあり、発想力不足・議論経験不足という意味でもあり。そう考えると、不出来な英語・経験のない議論の双方について「殴られる」良い機会になれば良いなと思って参加した、その目的は達成されたのかもしれませんが。
英語力も発想スピードも足りずに全体の議論の席ではあまり発言できなかったこともあり、結構手厳しい評価を受けました。それが現実だし、自分の感覚とも一致していたと感じますから、きちんと受け止めておこうと思います。ただ、今の自分については「英語力そのもののなさ」より単に「自信のなさ」が占めるものが多いのではないかという指摘は周囲の人から受けたし、確かにそうなのかもな、と思います。
そういうわけで、英語力・メディアに関すること・その他もろもろ含めて、「ある程度の自信を持てるように、しっかり勉強しなくては」というのが今の所感です。反省だらけだけど後悔のない、良い短期留学になったと感じています。

②参加後の予定
上にも書きましたが、様々な意味で「しっかり勉強する」必要性を痛感する留学となりましたから、その反省を生かすべく様々な勉強に取り組んでいきたいと考えています。具体的には、英語に触れる(できればSpeakingを伴う)機会を可能な限り多く作ること、日本語の席でも議論の場にコミットする機会を増やしていくこと、などがあります。

③今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス
もし出来るなら、日本に居る間にある程度英語でのコミュニケーションに自信をつけておいて、全体の議論の席にコミットできるようにしておくのが大きいと思います。ですが、(留学前の私がそうであったように)実際行ってみないとどんなものか良く分からないし勉強のやりようもなくてやる気が出ない、ということもあると思います。もしそうだったとしても、得られるものは何でも良いから得て帰って来ようという気持ちと、良く分からないなりに「殴られて」学ぶ程度の覚悟は持っていき、それなりに得られるものは(苦い思い出を含むものかもしれませんが)あると思いますし、それは絶対に将来の糧になることと思います。

その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物
良さそうなガイド本を、自分に合うものでよいかから1冊持っておくと、何かあった時に頼ることが出来て良いのではないのでしょうか。自分が持っていたものが万人に勧められるものとはあまり思いませんでしたのでここには書きませんが(カバーできていない地域も多かった)。それぞれが実行したい観光プランなどにもかなり依存するところがあると思いますし、自分で選ぶのが良いと思います。

②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。
現在特に手元にないです。申し訳ございません。

東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時): 教養学部(前期課程)2年

参加プログラム: IFCELS Summer Course (SOAS) 派遣先大学: SOAS, University of London

卒業・修了後の就職(希望)先: 公務員

派遣先大学の概要

ロンドン大学 SOAS はロンドン市内の中心部に位置する、アジア・アフリカ研究に特化した大学の一研究機関です。建物自体は小さく、あまり大規模な学校ではありませんが、アジア・アフリカをはじめとする異文化世界に開けており、留学生への対応も充実しています。

参加した動機

来年秋からの一年間のイギリス留学を考えており、その準備段階として海外経験を積むことを目的としていました。結果的に留学するにあたっての心構えや注意すべき点などを身をもって感じる事ができ、非常に有益な経験であったと思います。

参加の準備

①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

分からないことやうまくいかないことがあったら大学に必ず問い合わせましょう。また、寮の延泊手続きをした際に現地の担当者と英語で話さなければならず慌てふためいていましたが、そんなものは序章にすぎませんでした(笑)

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

Student Visitor Visa(6か月未満)の申請には、日本国籍の場合は、パスポート・留学先の大学からの受入承認書類・寮の滞在日程を表すものが必要です。審査官によって要求される書類が違う(!?)と言われていたので、英文の在学証明書・英文の成績証明書・銀行の残高証明書なども持っていきましたが私は使いませんでした。

③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)

特別なことは行いませんでしたが、出発直前は体に負担をかけないよう過ごしていました。

④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

東京海上日動の海外旅行保険に加入しました。補償内容は東大が薦める保証額の基準を満たすものを選びました。

⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

渡航日が7月25日だったため、7月最終週に行われる第二外国語の試験を繰り上げ実施して頂きました。大学が学生の国際化を妨げるべきでないとする担当の先生の尽力により実現したことなので本当に感謝していますが、最初にどうすべきか教務課に問い合わせた際は「それは学生が自己責任で教員と交渉して下さい」と言われ、ほぼ放置でした。それなのに、8月中旬からのコースに日本人が多すぎるから7月末からのコースに何人が移動してほしいとの学部からの通達がありました。その場合試験が受けられない学生が増えたとしても自己責任なのでしょうか。国際化を謳っておきながら、それによる学生の不利益に関しては学部側からの配慮は無く、対応に不備があると感じました。特に進学振分けを控えた3学期の成績に関して学生が神経質になるのは当然のことで、来年以降の夏期留学プログラム実施の際には是非改善して頂きたいと思いました。

⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

実は私の第一希望のプログラムは SOAS ではなく、より高い語学レベルが求められる別のコースでしたが、面接選考で英語の speaking 能力の低さゆえに叶いませんでした。興味があると言いつつも自分が専門にしたい分野に関する知識が浅薄だったことも理由の一つです。そのため、今回の留学にあたっては、3学期の間英語の授業(外国人教員による中級英語・PEAK 全学ゼミなど)を多くとって語学力の向上を目指した上、SOAS で学ぶ現代美術についての知識を深めておくために美術に関する授業をとったり美術史の本を読んだり美術館を訪れたりして準備をしました。

⑦日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

英語の勉強はいくらしておいても損はありません。

学習・研究について

①プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)

私が受けたのは現代美術のコースです。担当教官は lecturer と supporter の 2 人がおり、毎週月曜日と水曜日は「supporter による lecture preview・キーワードの意味調べや概要説明(1時間)→lecture・ひたすらノートをとる(1時間)→supporter による lecture review・講義内容のまとめやディスカッション(2時間)」のサイクルでした。火曜日と木曜日は午前中が美術館訪問、午後は学校に戻り軽い reading やセミナー(ディスカッション)。最終週の金曜日にはペアで現代美術の好きなテーマに関するペアプレゼンテーションがあり、毎週金曜日はそれに向けたプレゼン技術の実習などでした。

②学習・研究面でのアドバイス

日本にいる間に美術に関する基礎知識をつけておいて本当に良かったと思いました。初心者向けのコースと書いてありましたが集まっている学生の知識レベルはかなり高いもので、講義内容を理解できてもそのあとのディスカッションに使える知識が無いと苦労するなと感じました。また、現地で一番困るのは日本語の文献が無いことだろうということが分かっていたため、駒場図書館から現代美術に関する本を沢山借りて持っていき、それが役に立ちました。勿論向こうに英語文献はありますが、同じような情報が得られるのであれば英語で時間を浪費するのは避けた方がよいと思いました。

③語学面での苦勞・アドバイス等

初日に英語が話せなくて泣きました。「できない」という感覚を当たり前のものとして捉え、その中で抵抗していく姿勢を掴むまではとても辛かったです。3 週間で大きな進歩は見られましたが、それでもヨーロッパから来た学生などと比べると全く話せるうちに入りません。

生活について

①宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

SOAS が紹介する Dinwiddy House という寮に入りました。一人部屋が 6~7 個集まったフラットでキッチンを共有します。部屋はそれなりに快適ですがユニットバスの水はけがとても悪く異臭がすることもしばしば。セキュリティの問題から窓は 3 cm くらいしか開きません。冷房設備はありませんが気候が涼しいので特に困りません。事前の案内書類にはバスタブは有ると書いてあったのに無く、調理器具は無いと書いてあったのに電子レンジまでばっちり有ります。日本の常識が通用せずなかなか問題がある住環境のようにも思いましたがイギリスではこれが普通なのかもしれません。家賃はロンドンの中心部(大きなターミナル駅から徒歩約 5 分)にしては安いとのことでした。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

夏は晴れた日が多いですがそれ以外の季節は本当にどんよりしているようです。愚かにも長袖の服を持っていかなくて寒くて大変でした。現地で買おうにもロンドンの物価はとても高いです。大学までは寮から歩いて 25 分程度でした。地下鉄は運転間隔も狭く便利ですが、色んなところを行き来したい場合は貸自転車も便利です。2 ポンド払えば 24 時間乗り放題で、街角のサイクルスタンドで拾って別の好きなところで乗り捨てできます。車の運転が荒い、一方通行の道が多い、サイクルスタンドが見つからないと降りられないなどのデメリットもありますが、重宝することもありました。始めはちょっと怖いです。日本で運転免許を持っていれば多少感覚は掴みやすいです。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

初日に「お金ください」のような人に 2 人呼び止められました。どちらも振り切りましたが。英語もできず明らかに観光客のように一人でうろろしていると思われ目をつけられます。また、歯の矯正器具が壊れて現地の歯科に言ったのですが、歯科は保険がきかず 150 ポンド実費で負担する羽目になりました。気を付けられる問題でもないと思いますが…。

④要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空賃・授業料・宿泊費・保険料を除くと、主な用途は食費・交通費・娯楽費(そして上述の通り歯科の 150 ポンド)でした。現金で約 300 ポンド持っていた分は使い切り、カードで 15 万円分ほど消費しました。スーパーの食材は安いので完全に自炊できればそうでもなかったと思いますが、ロンドンには本当に物価が高いです。また私の場合はミュージカルなどのチケット代が内訳のかなりの部分を占めています。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

東大からの奨学金を 20 万円受給することになっています。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)

後期教養学部への進学を予定しており、来年度からの留学を検討しているため、週末に AIKOM(教養学部交換留学制度)の協定校であるウォーリック大学を訪れました。ロンドンから電車で 2 時間強の一人旅です。ロンドンとは違う落ち着いた雰囲気魅了され、来年の留学でここに来たいと強く思いました。秋学期が始まったら本格的に情報収集を始めようと思います。また、ロンドンに行くということで知人に紹介して貰った、東大出身でロンドンで劇団を持つ日本人演出家の某氏にお会いし、お話をお聞きするとともに劇団の公演の手伝いをさせて頂くという、貴重な体験ができました。

派遣先大学の環境について

①参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

外国人学生のためのサマープログラムのため、全般的に対応は丁寧でした。学校が企画したテムズ川のクルージングツアーなどもあり、学生同士の交流が図られていました。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

図書館と食堂は利用しやすいですが、図書館は基本的にアジア・アフリカ関連の書籍ばかりで、食堂は「イギリスの味」つまりあまり美味しくはありません…。私はポケット Wi-Fi を持って行ったため利用しませんでした。学校内の Wi-Fi もあり便利だったようです。

プログラムを振り返って

①プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

日本の忙しい日々から少し離れ、自分が日本でどのような生活をしてきたのか、どのようなしがらみにとらわれていたのか、客観視して自由になることができました。東大生は特に、このような自分を相対化する体験を積極的にすべきだと思います。また、約 1 か月という長さで海外に滞在するのは私にとって初めてだったため、一人で電車にのることひとつとっても大冒険でした。当たり前だと思っていたことが当たり前ではないということを実感するとても貴重な機会であったと同時に、最終的にはお店でスイスイ買い物できてミュージカルの台詞もかなり聞き取れるようになったという自分の成長を感じました。

②参加後の予定

今回達成できなかったことのリベンジをしたいという思いと、もう一度イギリスに行きたいという思いが強くなり、来年秋からの一年間の留学を検討しております。やはり自分の足で見学に行ったウォーリック大学への AIKOM を利用した交換留学を第一希望に準備を進めたいと思います。

③今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

最初は辛いことだらけで早く帰りたいと思うかもしれませんが、最後には「楽しかったな」と言えるものになると思います。頑張ってください。

その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。